

# 長崎県西彼杵郡 旧・外海町の 二型アクセント体系<sup>1</sup>

松 森 晶 子

## 1. はじめに

外海町<sup>そとめ</sup>は、1960年から2005年まで長崎県の西彼杵半島<sup>にしそのぎ</sup>にあった町である。2005年に長崎市に編入された。筆者は平山輝男（1951）の九州諸方言のアクセントの記述研究を参照にして、1996年～1997年にかけて、佐賀県・長崎県・熊本県の二型アクセント体系の報告されている地域のアクセント調査を行った。その調査地点は、長崎県佐世保市、波佐見町<sup>はさみ</sup>、旧・外海町（現在は長崎県長崎市に入る）、諫早市、大村市、島原市、佐賀県鹿島市、太良町、熊本県天草郡旧・本渡市<sup>ほんど</sup>（現在は熊本市天草市に入る）、旧・松島町（現在は熊本県上天草市に入る）である。この一連の調査では、類別語彙1～3拍名詞、動詞、形容詞のいくつかの活用形のアクセントとともに、複合名詞のアクセント型についての調査を行った。

本稿で特に焦点を当てて記述・報告する旧・外海町のアクセント体系<sup>2</sup>は、その調査の際に見い出されたものである。

この旧・外海町の方言は、周辺地域の多くの方言と同様、語の長さにかかわらず2種類の型が対立する、いわゆる「二型アクセント体系」を持っている（以下、その体系内の2種類の型を、A型、B型と呼ぶ）。しかしこの旧・外海町の方言は、これまで報告されてきた長崎県や佐賀県の多くの二型アクセント体系（これを以下、「長崎・佐賀主流タイプ」と呼ぶ）のうちの、どの体系にも見られないような、際立った特徴を持っている。

まずこの旧・外海町の方言は、そのA型の音調型が、周辺に分布する長崎・佐賀主流タイプのそれとは、異なっている。長崎・佐賀主流タイプのA型は、文節の頭から数えて2つ目のモーラ直後にピッチの下降が生じ、原則的にそれより後ろ（右）にその下降位置がずれていくことはな

---

<sup>1</sup> 本稿は、国立国語研究所の共同研究「日本語レキシコンの音韻特性」「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」（研究代表者 窪蘭晴夫）の研究成果の一部である。また本研究は科研費補助金基盤研究（A）（課題番号26244022）の助成を受けている。

<sup>2</sup> 調査は、1997年3月に行われた。話者は、H氏（大正14年3月生まれ、女性）とS氏（昭和10年1月生まれ、女性）の2名である。

い。これに対して、この旧・外海町のA型のピッチの下降位置は、かならずしも文節の頭から2モーラ目、と固定されておらず、それより後ろ（右）のほう（原則的に3モーラ目）に、ずれていくことがある。

また旧・外海町方言の体系は、特にそのB型に、周辺の二型アクセント体系にはこれまで報告されてこなかったような、顕著な特徴が見られる。長崎・佐賀主流タイプの二型アクセント体系内のB型は、文節全体を通してピッチの急激な下降や上昇が見られない、平坦な音調型を持っている。これに対して旧・外海町の二型アクセント体系内のB型は、文節内に2つの高いピッチの山を持つ、いわゆる「重起伏」音調を持っている。

以上のようなA型、B型の音調型の実質的な違いに加えて、この旧・外海町は、その複合語のアクセントについても、周辺の長崎・佐賀主流タイプのそれとは、異なった特徴を持つ。長崎・佐賀主流タイプの二型アクセント体系では、その一般的な特徴として、「式保存」法則の例外が観察される、という指摘（平山1951：137）が古くからある。これは、「前部要素が3モーラ以上の語根から成る」という条件のもとに、A型とB型の区別が消失する（つまり型の中和が見られる）、という特徴である（松浦2005, 2008, 2014）。

これに対し、この旧・外海町のアクセント体系では、そのような式保存の例外が観察されない。つまりこの体系では、前部要素が3モーラ以上の語根から成る複合語においても、A型とB型が区別される。すなわち、同じ長崎県の方言でありながら、長崎市や諫早市などの方言とは異なって、上述の条件を満たしていても、その体系内の2つの型が中和することはないのである。

本稿の目的は、以上のような特徴を持つ旧・外海町のアクセントの記述を行うことにある。

## 2. 旧・外海町の二型アクセント体系における型の弁別的特徴

まず、長崎・佐賀主流タイプの二型アクセント体系の特徴を見てみよう。(1)は、その代表的な存在ともいえる長崎市方言の音調型を、平子・五十嵐(2016a)を参照にしながら示したものである。以下、本稿では、[はピッチの上昇の位置を、]はその下降の位置を示す。また、]]は、拍内下降（その直前のモーラ内部に下降が見られること）を示す。さらに、文節全体が高くもなく低くもなく平坦な音調で実現する型については、平子・五十嵐(2016a, b)の表記を採用して、その文節末尾に=を付けて示すこととする。

### (1) 長崎市方言の音調型（平子・五十嵐2016aに基づく。）

	A型	B型
1モーラ名詞	柄 [エ]]	絵 エ=
	[エ]ガ	エガ=
2モーラ名詞	歌 [ウ]タ	猿 サル=
	ウ[タ]ガ	サルガ=
3モーラ名詞	煙 ケ[ム]リ	頭 アタマ=
	ケ[ム]リガ	アタマガ=

長崎市方言では、A型のピッチの下降は、(1)のウ[タ]ガ、ケ[ム]リガという音調型からも分かるように、原則的に文節の頭から数えて2つ目のモーラ直後に実現する。一方、そのB型には、サルガ=、アタマガ=のように、文節全体のピッチが高くもなく、低くもなく、全体的に起伏のない、平坦な音調型が実現する。

これに対して、本稿で焦点を当てる旧・外海町の体系内の2つの音調型の特徴の概要は、次のようにまとめることができる。以下は、旧・外海町のH氏（大正14年3月生まれ、女性）の二型体系の音調型を示している。

## (2) 旧・外海町の2つの音調型（その1）（H氏の音調型）

	A型		B型
1 モーラ語 毛	[ケ]] [ケ]ガ	目	メ= メ[ガ～メガ=
2 モーラ語 鼻	[ハ]ナ ハ[ナ]ガ	花	ハ[ナ～ハナ= [ハ]ナ[ガ
3 モーラ語 小麦	コ[ム]ギ コ[ムギ]ガ	頭	[ア]タ[マ [アタ]マ[ガ
4 モーラ語 下駄箱	ゲ[タ]バコ ゲ[タバ]コガ	ごみ箱	[ゴミ]バ[コ [ゴミ]バコ[ガ

この旧・外海町のアクセント体系の際立った特徴は、(1)に示した長崎市方言の体系と比較してみると、いっそう鮮明になる。その特徴の最たるものは、まず、そのB型の音調型にある。その型は、長崎市方言のB型（サルガ=、アタマガ=）のような、ピッチの起伏のない平坦な音調型ではなく、[ハ]ナ[ガ、[アタ]マ[ガのように、原則的に文節内部に2つのピッチの頂点が出現する、いわゆる「重起伏」の音調型である。

あわせて旧・外海町のアクセント体系は、そのA型の音調型にも特徴がある。長崎・佐賀主流タイプのA型は、(1)の長崎市の例に典型的に示されているように、文節が短い場合（長崎市方言の場合は2モーラ以下）には、[エ]ガ、[ウ]タのように、その文節の頭から数えて第1モーラ目直後に、それが長い場合には、ウ[タ]ガ、ケ[ム]リガのように、文節の頭から数えて第2モーラ目直後に、ピッチの急な下降が出現する。しかしその下降位置は、文節の頭から2つ目のモーラより後ろ（右）に、ずれていくことはない。これに対し旧・外海町のA型の下降位置は、(2)のコ[ムギ]ガ、ゲ[タバ]コガの例から分かるように、文節全体のモーラ数が4モーラ以上になると、前から2つ目ではなく、3つ目のモーラに、ずれていくことがある。つまりこの方言のA型の下降位置は、長崎市方言のそれと違って、文節の頭から数えて2モーラ目、と固定されてはいないのである。

以上の特徴について、以下、ひとつずつ検討していこう。

## 2.1. A型の特徴

さて、(2)を見ると、旧・外海町方言のA型の下がり目の位置は、文節全体の長さが2モーラ以下の場合には、その頭から数えて1つ目、その長さが3モーラの場合には、その2つ目のモーラ直後に出現していることが分かる。ここまでは、長崎・佐賀主流タイプの(1)と、その特徴を共有している。

しかし、文節全体の長さが4モーラ以上になると、長崎・佐賀主流タイプとの違いが出てくる。前述のように、長崎・佐賀主流タイプのA型は、(1)のケ [ム] リガ の例から分かるように、文節全体の長さが3モーラ以上になっても、その下降位置が2モーラ目より後ろにずれていくことはない。これに対し、旧・外海町のA型の下がり目の位置は、(2)のコ [ムギ] ガ の例から見て取れるように、3モーラ目にずれることがある。

次の例は、それを典型的に示している。(3)は前述の話者H氏のA型の3モーラ名詞の示す音調型である。たとえば「桜」のピッチの下降位置は、単独形ではサ [ク] ラ のように2つ目のモーラ直後に出現するのだが、それに助詞を付けた文節内では、サ [クラ] ガ のように、文節の3つ目のモーラ直後にずれていることが、次の例から分かる。

### (3) 旧・外海町のA型の下降位置 (H氏の音調型)

サ [ク] ラ、サ [クラ] ガ (桜、桜が)、カ [ブ] ラ、カ [ブラ] ガ (蕪、蕪が)、ク [ル] マ、ク [ルマ] ガ (車、車が)、チ [カ] ラ、チ [カラ] ガ (力、力が)、ア [イ] ダ、ア [イダ] ガ (間、間が)、ム [ス] メ、ム [スメ] ガ (娘、娘が)、コ [ム] ギ、コ [ムギ] ガ (小麦、小麦が)

しかしこのA型のピッチの下降位置の移動は、全体が4モーラ以上の文節において常に生じるとは限らない。H氏から得られたデータの中には、同じA型の3モーラ名詞に助詞が後続して、文節全体の長さが4モーラになっても、その下降位置が後ろにずれていかない例も存在した。たとえば、次の(4)の例が示すように、ミ [サ] キ (岬) は、助詞が付いても、ミ [サ] キガ のように、依然としてその2モーラ目直後に下降が生じている。

### (4) 旧・外海町のA型の下降位置 (H氏の音調型)

ト [ナ] リ、ト [ナ] リガ (隣、隣が)、ク [ツ] ワ、ク [ツ] ワガ (轡、轡が)、ハ [ニ] ワ、ハ [ニ] ワガ (埴輪、埴輪が)、ミ [ナ] ト、ミ [ナ] トガ (港、港が)、ヤ [ナ] ギ、ヤ [ナ] ギガ (柳、柳が)、ミ [サ] キ、ミ [サ] キガ (岬、岬が)

収集した3モーラ名詞のデータの中には、助詞が後続して文節の長さが4モーラになると、(3)の例のように、そのピッチの下降位置が1モーラ後ろ(右)にずれていく場合と、(4)の例のように、それがずれていかない場合とがあった。しかしながら、どのような条件のもとにこの下降位置の移動が起こるのかについては、現時点では不明とせざるをえない。

また、(2)を見ると、コ [ムギ] ガ の場合には、そのピッチの下降位置は文節の第3モーラ目に出現しているのに、同じように文節全体が4モーラの長さを持っていても、ゲ [タ] バコ の下降位置は第2モーラ目を実現し、第3モーラ目には移動していないことが分かる。この理由

も、不明である。

H氏は、(2) の ゲ [タ] バコ に助詞を後続させた ゲ [タバ] コガ (下駄箱が) の場合には、文節の第3モーラ目に下降位置を移動させた。しかし、同じような条件を持つ カ [シ] バコガ (菓子箱が) の場合には、その下がり目を3モーラ目に移動させず、単語単独形と同じ位置に下降を出現させた。次の (5) のA型の2つの例の違いを検討してほしい。

#### (5) 旧・外海町の2つの音調型 (その2) (H氏の音調型)

	A型	B型
下駄箱	ゲ [タ] バコ ゲ [タバ] コガ	ごみ箱 [ゴミ] バ [コ] [ゴミ] バコ [ガ]
菓子箱	カ [シ] バコ カ [シ] バコガ	箸箱 [ハシ] バ [コ] [ハシ] バコ [ガ]

以上の観察結果から見て取れるように、この旧・外海町の体系では、A型のピッチの下降位置は、前から数えてx番目、と固定されているわけではないことが分かる。この点が、この旧・外海町の二型アクセント体系が、長崎・佐賀主流タイプの体系と大きく異なる点である。

詳細については後述するが、この方言ではB型にも、その名詞から始まる文節の頭のほうに高いピッチの音調が出現する。そしてそのピッチが下降する位置は、(5) の [ゴミ] バコ [ガ] (ごみ箱が) に例示されるように、文節の頭から数えて第2モーラ目であることが多い。

このことから、ピッチの「下降」がどこに現れるか、という情報は、この方言の弁別的な特徴ではない、ということが分かる。この点については、後述する。

## 2.2. B型の特徴

さて、この旧・外海町の体系では、特にそのB型に、長崎・佐賀主流タイプのB型には見られないような、顕著な特徴が認められる。

この方言のB型は、その文節の最後のモーラが1モーラ分だけ高くなる、という特徴を持っている。それと同時にこの方言のB型には、3モーラ以上の長さを持つ文節内で、その文節の出だし部分のピッチを高く開始する、という特徴が伴う。その結果、たとえばB型の2モーラ名詞に主格助詞が後続して、文節全体が3モーラの長さになると、[ハ] ナ [ガ] (花が)、[ソ] ラ [ガ] (空が)、[イ] タ [ガ] (板が) のように、その名詞から始まる文節には、2つのピッチの頂点が観察され、いわゆる「重起伏」音調がそこに出現する。

(2) や (5) の例からも見て取れるように、その2つの高い音調の山のうちの2つ目の音調の山は、常に文節の最後尾の1モーラに実現する。これに対して、そのひとつめの山のほうは、原則的に文節の2つ目のモーラまで高くなって実現する、という特徴を持っている。(しかし、これも、かならずしも常に2モーラ目、と固定しているわけではないことについては、後述する。)

さて、2.1節ですでに述べたように、A型から始まる文節では、その文節全体の長さが4モーラ以上になると、ピッチの下降位置が第3モーラ目にずれることがある。このようにA型が3モーラ目に下降を送ると、(B型の下降位置が原則的に第2モーラ目直後にあるので) 2つの型

の下降位置には、違いが生じる。その結果、A型の下降位置のほうが、1モーラ分だけ、B型のそれより先行する（右に出現する）ことが多くなる。

次の例は、もうひとりの話者S氏（昭和10年1月生まれ、女性）の示す音調型である。これらの例を見ると、A型の下降位置は文節の頭から数えて3つ目のモーラに実現し、B型のそれより、1モーラ分だけ後ろのほうに（右のほうに）出現している。そのため一見、この体系内の2つの型は、その下降位置によって区別されているかのように見えることがある。

#### (6) 旧・外海町の2つの音調型（その3）（S氏の音調型）

A型：ム [シカ] ゴガ (虫籠が)、タ [ケカ] ゴガ (竹籠が)、サ [サカ] ゴガ (笹籠が)

B型：ハ [ナ] カゴ [ガ (花籠が)、ワ [ラ] カゴ [ガ (藁籠が)、ク [サ] カゴ [ガ (草籠が)

A型：ア [メイ] ロガ (飴色が)、モ [モイ] ロガ (桃色が)

B型：ク [サ] イロ [ガ (草色が)、ニ [ジ] イロ [ガ (虹色が)

しかしながらこのB型のピッチの下降位置も、常に2つ目のモーラ直後、と定まっているわけではなく、文節の後ろ（右）のほうにずれていくことがある。同じ話者S氏から得られたデータの中には、次の例に見られるように、B型のピッチの下降位置が、文節の第3モーラ直後に出現した例もあった<sup>3</sup>。

#### (7) 旧・外海町の2つの音調型（その4）（S氏の音調型）

A型：ナ [シバ] タケガ (梨畑が)、 ウ [メバ] タケガ (梅畑が)、

モ [モバ] タケガ (桃畑が)、 ネ [ギバ] タケガ (葱畑が)、

ヒ [エバ] タケガ (稗畑が)、 カ [キバ] タケガ (柿畑が)

B型：マ [メバ] タケ [ガ (豆畑が)、 ハ [ナバ] タケ [ガ (花畑が)、

ウ [リバ] タケ [ガ (瓜畑が)、 ム [ギバ] タケ [ガ (麦畑が)、

イ [モバ] タケ [ガ (芋畑が)、 ア [ワバ] タケ [ガ (粟畑が)

その結果、B型のピッチの下降は、A型のそれと同じ位置に出現することになる<sup>4</sup>。

<sup>3</sup> さらにS氏の発音では、A型の下降位置が、次のように、文節の4モーラ目にずれていくこともあった。

A型：ア [ズキイ] ロガ (小豆色が)、 コ [ムギイ] ロガ (小麦色が)

B型：ネ [ズミ] イロ [ガ (鼠色が)、 タ [マゴ] イロ [ガ (卵色が)

<sup>4</sup> S氏の場合、むしろB型の下降位置のほうが、A型のそれよりも右に出現した場合もあった。

A型：ト [マト] バタケガ (トマト畑が)、 コ [ムギ] バタケガ (小麦畑が)

B型：ナ [スビバ] タケ [ガ (茄子畑が)、 ミ [カンバ] タケ [ガ (蜜柑畑が)

この点から見ても、この方言では、ピッチの下降位置が弁別的に働いているのではないことが分かる。

以上述べてきたことから明らかなように、この旧・外海町の2つの型は、そのピッチの下降位置によって区別されているわけではない。つまり、B型に出現する重起伏の2つのピッチの山のうちの1つ目の山のピッチの下降位置は、A型との区別を示すためには機能していない、ということになる。

また、この方言のB型の音調には、文節全体が3モーラ以下の場合に、次のサカガ= (坂が)のように、文節全体が高くもなく、低くもなく、ピッチの起伏がない平坦な音調型が出現する、という現象が観察された。次の音調型は、H氏のものである。

#### (8) 旧・外海町のB型の2種類の音調型 (H氏の音調型)

- a. シマ= (島)、[シ] マ [ガ (島が)、ク [モ (雲)、[ク] モ [ガ (雲が)、ワ [タ (綿)、[ワ] タ [ガ (綿が)、ナベ= (鍋)、[ナ] ベ [ガ (鍋が)、ウス= (臼)、[ウ] ス [ガ (臼が)
- b. サカ= (坂)、サカガ= (坂が)、ナワ= (縄)、ナワガ= (縄が)、ツナ= (綱)、ツナガ= (綱が)、オケ= (桶)、オケガ= (桶が)、ウミ= (海)、ウミガ= (海が)

つまり、この条件のもとでは、2つのピッチの山を持つ音調型の変異型として、ピッチの起伏のない、平坦な音調型が出現する。今、高いピッチをH、低いピッチをL、中程度のピッチをMで表記するとすれば、これはHLH>MMMのような変化によって生じたもの、と解釈することが可能である。

同じようなことは、B型の3モーラ名詞の単独言い切り形でも生じることがあった。これはS氏の発音において、特に顕著に見られた特徴である。次の音調型は、S氏のものである。

#### (9) 旧・外海町のB型の音調型 (S氏の音調型)

- a. [ア] タ [マ (頭)、[オ] ト [コ (男)、[オ] ヤ [コ (親子)、[ス] モ [モ (李)、[ネ] ズ [ミ (鼠)
- b. カガミ= (鏡)、スズリ= (硯)、イノチ= (命)、ハタケ= (畑)、ヒダリ= (左)

ここでも、HLH>MMMのような変化が生じていることが分かる。(しかしながら、どのような条件によって、このB型の2つの変異型のうちのどちらが出現するのかが決まるのか、という点についても、今のところ不明とせざるをえない。) このカガミ=のような、文節全体が平坦なピッチで出現する音調型は、[ア] タ [マのような重起伏音調型の変異型、と本稿では見なしておくことにする。

ちなみに筆者は、旧・外海町に現在観察されているこのB型の音調型は、佐賀県・長崎県・熊本県にわたって広く分布する長崎・佐賀主流タイプの二型体系の成立を考える際に、重要な手がかりを提供するものと考えている。これまで長崎・佐賀主流タイプのB型には、文節全体にわたってピッチの平坦な音調型が出現する、と記述されてきた。このような平坦な音調型の成立に

も、実は重起伏音調が深くかかわっている、というのが本稿の採る立場である<sup>5</sup>。私見では、この長崎・佐賀主流タイプのB型も、古くはHLHのような重起伏の音調型を経て、現在のMMMのような音調型に変化して生じた可能性がある。(長崎・佐賀主流タイプのB型の成立について、なぜ、このように考えるのか、という議論の詳細は、別稿にゆずることとしたい。)

### 2.3. 二種類の型の弁別の特徴

さて、今、高い音調を●で、低い音調を○で、中程度の音調を◎で示しながら、以上の考察をまとめると、この旧・外海町の体系には、次のような2つの型が認められることになる。

#### (10) 外海町の二型アクセント体系における2つの型の違い

A型	●○	●●○	●●○○	●●○○○	●●●○○○
			(●●●○)	(●●●○○)	(●●●●○○)
B型	○●	●○○	●●○○	●●○○●	●●○○○●
	◎◎	◎◎◎			(●●●○○●)

文節全体が短い場合には、この方言の2つの型は、次のように区別されている。以下は、アク

<sup>5</sup> 現時点での仮説は、次のようなものである。この長崎・佐賀主流タイプにおけるB型の祖型は、低く開始して文節末のモーラだけを1拍分高くする \*LLLH のようなものだったと考えられる。そこに文節の頭にあらたにH音調が生じ、\*HLLH のような重起伏音調が生じた。その重起伏音調が次のような経緯を経て、最終的には高平化 (HLH>MMM) によって、平坦な音調型に変化した、と考えるのである。

B型 \*LLLH > \*HLLH > \*HHLH > \*MMMM  
 祖型 重起伏成立 一つ目の山が右にずれていく 高平化

現代の長崎・佐賀主流タイプのB型の音調型は、このようなプロセスを経て生じた、と考える仮説を、ここでは提示しておく。

ちなみに、佐賀県中部のアクセントについて、平山 (1951) は、次のような記述を残している。「なお、注意すべきことは、この方言の発音では一般に語末が弱まるために、B型における自然発音では、上下・上上下・上上上下・上……上下 のように語末のみを下げて、他は全部高いと思われ易いことである。この現象は、佐賀中部音調の範囲内で特に目立つのであるが、決して『上下・上……上下』の型と見るべきではない。」平山 (1951: 102-103)。このようにB型の語末、あるいは文節末の1モーラだけが、直前のモーラよりもやや低くつくような音調型は、筆者も佐賀県の鹿島方言および太良方言において、その存在を確認している。

また、平子・五十嵐 (2016a) は、佐賀県の旧杵島郡江北村方言において、B型の語に助詞が続くと、その助詞が当該の名詞の語末拍よりも低いピッチで実現することを、観察・記述している。さらに平子・五十嵐 (2016b) では、熊本県玉名市方言でも、B型の3モーラ名詞が(後続の助詞の有無に関係なく)文節末尾から2つ目のモーラ直後に、ピッチの下降を持つ型で出現することを報告している。

これらの現象の発生について、筆者は、長崎・佐賀主流タイプの二型体系のB型の祖型に建てられた重起伏の音調型 (\*HLLH) の一つ目のH音調が順次、後ろにずれていった結果、\*HHLH>\*HHHM のように、2つのH音調の山が文節の最後尾のモーラ直前でぶつかって、最後のH音調を一段階低くする、という現象が起こったために生じたと考えている。このようなB型の成立に関する通時的仮説についての議論も、別稿で行いたい。

セントだけで区別される2音節名詞の最小対（「鼻」対「花」、「旅」対「足袋」など）の音調型を示す。

(11) 旧・外海町の2種類の型の区別（最少対を用いて）

A型	B型
鼻 [ハ]ナ、ハ[ナ]ガ	花 ハ[ナ、 [ハ]ナ[ガ
旅 [タ]ビ、タ[ビ]ガ	足袋 タ[ビ、 [タ]ビ[ガ
川 [カ]ワ、カ[ワ]ガ	皮 カ[ワ、 [カ]ワ[ガ
橋 [ハ]シ、ハ[シ]ガ	箸 ハシ=、[ハ]シ[ガ
鮎 [ア]メ、ア[メ]ガ	雨 アメ=、[ア]メ[ガ

この例から見て取れるように、この方言の2つの型は、(特に文節全体が短い場合は) そのピッチの下降位置によって、はっきりと区別できる。助詞 ガ が後続すると、A型はハ[ナ]ガのように、ピッチの下降が当該の文節の2モーラ目直後に実現するのに対して、B型のほうは、[ハ]ナ[ガ]のように、それが1モーラ目直後に実現する。つまりB型よりA型のほうが、1モーラ分、後ろに(右に)下降が実現する「傾向」がこの方言には見られるのである。次の例にも、その傾向が現れている。

(12) 旧・外海町の2つの音調型(その5) (H氏の音調型)

A型: サ[カナ]トリアミ(魚捕り網)、 サ[カナ]トリアミガ(魚捕り網が)  
 B型: [ウズ]ラトリア[ミ(鶉捕り網)、 [ウズ]ラトリアミ[ガ(鶉捕り網が)

しかしながら、これはあくまで「傾向」である。前述のように、A型のピッチの下降位置は、文節が長くなっても常に3モーラ目に移動するとは限らず、文節の第2モーラ目にとどまる場合も多い。その結果、(特に文節全体が長い場合に) A型とB型は同じ位置(すなわち、文節の前から数えて2つ目のモーラ)に、その下降を実現させることもある。次の例は、その典型である。

(13) 旧・外海町の2つの音調型(その6) (H氏の音調型)

A型: サ[サ]クイムシ(笹喰い虫)、 ウ[メ]クイムシ(梅喰い虫)  
 B型: [コメ]クイム[シ(米喰い虫)、 [マツ]クイム[シ(松喰い虫)

次の例についても、同じことが言える。助詞が後続した下線部の例では、2つの型の下降位置は異なっているが、単語単独形の発音では、両者とも同じ位置(すなわち文節の頭から数えて2モーラ目)に、そのピッチ下降を実現させていることが分かる。

(14) 旧・外海町の2つの音調型(その7) (H氏の音調型)

A型: カ[ザ]グルマ(風車)、 カ[ザグ]ルマガ(風車が)  
 B型: [イト]グル[マ(糸車)、 [イト]グルマ[ガ(糸車が)

また比較的長い（モーラ数の多い）文節においては、A型も、B型も、両者ともその下降位置を文節の第3モーラ目直後に実現させる場合もあった。たとえば次の例では、ピッチの下降位置は、両者ともその第3モーラ目を実現している。

#### (15) 旧・外海町の2つの音調型（その8）（H氏の音調型）

A型：チ [マキ] ダンゴ （粽団子）、 チ [マキ] ダンゴ ガ （粽団子が）  
B型：[ヨモギ] ダン [ゴ] （蓬団子）、 [ヨモギ] ダンゴ [ガ] （蓬団子が）

#### (16) 旧・外海町の2つの音調型（その9）（H氏の音調型）

A型：セ [ミト] リアミ （蟬取り網）、 カ [ニト] リア ミ （蟹捕り網）  
ア [ワビ] トリアミ （鰻取り網）、 カ [ツオ] トリアミ （鯉取り網）  
B型：[カイト] リア [ミ] （貝採り網）  
[クジラ] トリア [ミ] （鯨採り網）、 [ナマズ] トリア [ミ] （鯰採り網）

以上の観察結果をまとめると、この方言の2つの型の違いは、そのピッチの下降位置がどこかによって決まっているのではない、ということになる。

これまで見てきたすべての例が示しているように、この旧・外海町方言の2つの型の区別は、「文節末の高い音調の有無」によって決まる、と言ってもよいだろう。B型は、常に文節末のピッチが1モーラ分だけ高くなり、A型のほうにはそれが観察されない、という点、すなわち文節の最後の1モーラが「低くつくか、高くつくか」という点が、この方言の2つの型の区別のために機能している弁別的特徴である、と考えられる。

### 3. 旧・外海町の複合名詞の韻律型—天草諸島の本渡方言と比較しながら

#### 3.1. 長崎・佐賀主流タイプの式保存とその例外の発生

一般的に、九州西南部二型アクセント体系の複合語の韻律型は、その前部要素の韻律型（式）が複合語全体の韻律型（式）として実現することによって決まる。今、上野（1997）にしたがって、複合語の前部要素をX、後部要素をY、複合語全体のアクセントをZ、と呼ぶこととする。

#### (17) 複合語Zのアクセント型

X（前部要素）+ Y（後部要素）= Z（複合語）

鹿児島方言を代表とする九州の二型アクセント体系では、一般的に、Xの持つ韻律特徴が全体の型Zとなり、Yの持つ韻律特徴が消える。このように前部要素Xの型がそのまま複合語全体のそれになる、という規則は、伝統的に「式保存」と呼ばれているため、本稿では以下、これを便宜的に「式保存」と呼んで議論する。

以下では、天草諸島の旧・本渡市方言の複合名詞<sup>6</sup>を一例にとって、その式保存を示すこととする。この方言は熊本県の一方言ではあるが、その2つの型の音調型の様相から「長崎・佐賀主流タイプ」の体系を持つものと言える。

次の例は、Xが2モーラの場合である。XがA型ならZもA型となり、XがB型ならZもB型となっていることが、ここから分かる。

### (18) 天草諸島の旧・本渡市に見られる式保存 (T氏の音調型)

#### a. 前部X・後部Yともに2モーラの複合名詞

	A型		B型
X 筆	[フ] デ [フデ] ガ	ごみ	ゴ [ミ ゴ [ミガ
Z 筆箱	[フデ] バコ [フデ] バコガ	ごみ箱	ゴ [ミバコ ゴ [ミバコガ
X 鳥	[ト] リ [トリ] ガ	花	ハ [ナ ハ [ナガ
Z 鳥籠	[トリ] カゴ [トリ] カゴガ	花籠	ハ [ナカゴ ハ [ナカゴガ

#### b. 前部Xは2モーラ、後部Yは3モーラの複合名詞

	A型		B型
X 紙	[カ] ミ [カミ] ガ	箸	ハ [シ ハ [シガ
Z 紙袋	[カミ] ブクロ [カミ] ブクロガ	箸袋	ハ [シブクロ ハ [シブクロガ
X 鼻	[ハ] ナ [ハナ] ガ	霜	シ [モ シ [モガ
Z 鼻柱	[ハナ] バシラ [ハナ] バシラガ	霜柱	シ [モバシラ シ [モバシラガ
X 雪	[ユ] キ [ユキ] ガ	猫	ネ [コ ネ [コガ
Z 雪柳	[ユキ] ヤナギ [ユキ] ヤナギガ	猫柳	ネ [コヤナギ ネ [コヤナギガ

<sup>6</sup> 旧・本渡市のデータは、1997年3月の天草諸島の調査によって得られた。話者はF氏（大正3年生まれ、女性）、およびT氏（昭和15年生まれ、男性）である。なお、ここで提示する複合名詞のアクセント型は、主としてT氏のものである。

さて前述のように、長崎県の二型アクセント体系には、ある特定の条件のもとに「式保存」の例外が生じる（坂口 2001、松浦 2005, 2008, 2014）ことが、これまで報告されてきた。松浦（2005, 2008, 2014）は、この例外は決して無秩序に発生するわけではなく、その前部要素の長さ（モーラ数）によって予測できることを明らかにした。すなわち、前部要素Xが2モーラ以下の語根から成る複合語Zには式保存が成り立つのに対して、Xが3モーラ以上の語根から成るZでは、それが成り立たず、どちらもB型となって実現する（松浦2005, 2008, 2014）。また平子・五十嵐（2016a）は、同じような特徴が、佐賀県の二型アクセント体系の方言にも観察されることを明らかにしている。つまり、このような式保存の発生は、長崎・佐賀主流タイプの一般的な特性である可能性が高い。

前述の天草の旧・本渡市方言は、そのような特徴を示す方言の典型である。この方言では、上述のような条件下では、A型とB型の区別が中和してしまう（木部2012）。以下の下線部は、式保存の例外となる音調型を示している。下線部は、そのXがA型であるのにもかかわらず、ZはA型ではなく、B型で出現していることを示す。

#### (19) 天草諸島の旧・本渡市における式保存とその例外（T氏の音調型）

##### a. 前部Xは3モーラ、後部Yは2モーラの複合名詞

	A型		B型
X 魚	サ [カ] ナ サ [カ] ナガ	鼠	ネ [ズミ ネ [ズミガ
Z 魚籠	<u>サ [カナカゴ</u> <u>サ [カナカゴガ</u>	鼠籠	ネ [ズミカゴ ネ [ズミカゴガ
X 田舎	イ [ナ] カ イ [ナ] カガ	畑	ハ [タケ ハ [タケガ
Z 田舎道	<u>イ [ナカミチ</u> <u>イ [ナカミチガ</u>	畑道	ハ [タケミチ ハ [タケミチガ

##### b. 前部X・後部Yともに3モーラの複合名詞

	A型		B型
X 小豆	ア [ズキ ア [ズ] キガ	蜜柑	ミ [カン ミ [カンガ
Z 小豆畑	<u>ア [ズキバタケ</u> <u>ア [ズキバタケガ</u>	蜜柑畑	ミ [カンバタケ ミ [カンバタケガ
X 田舎	イ [ナ] カ イ [ナ] カガ	鶉	ウ [ズラ ウ [ズラガ
Z 田舎団子	<u>イ [ナカダンゴ</u> <u>イ [ナカダンゴガ</u>	鶉団子	ウ [ズラダンゴ ウ [ズラダンゴガ

このように、旧・本渡市方言では、複合名詞の前部要素Xが3モーラ以上の場合には、2つの型が中和し、どちらもB型で実現することが分かっている。すなわちこの方言は、他の多くの長崎・佐賀主流タイプの方言と同様、Xが3モーラ以上の場合に、2つの型の中和が起こる。

### 3.2. 旧・外海町における式保存

ところが、旧・外海町の複合名詞のアクセント規則には、前節で述べた式保存の例外が見られない。つまりこの旧・外海町のアクセント体系では、前部要素Xが3モーラ以上の語根から成る複合名詞Zにおいても、A型とB型は中和せず、2つの型の違いが明瞭に現れる。

まず、Xが2モーラ名詞の複合名詞Zの例を見てみよう。以下の(21)と(22)の例においてXとなっている名詞の、助詞ガが後続した場合の音調型を、まず、(20)に挙げることにする。

#### (20) 前部要素Xの音調型 (旧・外海町) (H氏の音調型)

A型：フ [デ] ガ (筆が)、カ [シ] ガ (菓子が)、ト [リ] ガ (鳥が)、サ [サ] ガ (笹が)、ミ [ズ] ガ (水が)、タ [カ] ガ (鷹が)

B型：[ゴ] ミ [ガ (ゴミが)、[ノ] リ [ガ (海苔が)、クサガ = (草が)、クリガ = (栗が)、[ワ] タ [ガ (綿が)、クモガ = (蜘蛛が)

これらの名詞を前部要素Xにした複合名詞Zを作って発音してもらった結果、次のような音調型が得られた。ここには、式保存が成り立っていることが分かる。(ちなみに、以下の(21)に挙げるZの後部要素Yの型を示すと、「箱」(ハ [コ] ガ)、「籠」(カ [ゴ] ガ)はA型、「団子」([ダン] ゴ [ガ)、「枕」([マク] ラ [ガ)はB型である。)

#### (21) 旧・外海町の複合名詞Zにおける式保存 (Xが2モーラの場合) (H氏の音調型)

	A型		B型
筆箱	フ [デ] バコ フ [デ] バコガ	ゴミ箱	[ゴミ] バ [コ [ゴミ] バコ [ガ
菓子箱	カ [シ] バコ カ [シ] バコ ガ	海苔箱	[ノリ] バ [コ [ノリバ] コ [ガ
鳥籠	ト [リ] カゴ ト [リ カ] ゴ ガ	草籠	[クサ] カ [ゴ [クサ] カゴ [ガ
笹団子	サ [サ] ダンゴ サ [サダン] ゴ ガ	栗団子	[クリ] ダン [ゴ [クリ] ダンゴ [ガ
水枕	ミ [ズ] マクラ ミ [ズ マ] クラガ	綿枕	[ワ タ] マ ク [ラ [ワ タマ] ク ラ [ガ

同じようなことが、3要素から成る複合名詞についても言える。次の複合名詞においても、一番先頭の要素がA型であれば、複合名詞もA型になり、それがB型であれば、複合名詞もB型になっていることが分かる。

(22) 旧・外海町の複合名詞Zにおける式保存 (Xが2モーラの場合) (H氏の音調型)

- A型: タ [カ] トリアミ (鷹捕り網)
- B型: [クモ] トリア [ミ] (蜘蛛捕り網)

次に、Xが3モーラ名詞の例を見てみよう。まず、以下の(24)と(25)の例の中で、Xとなっている名詞の音調型を以下に挙げる。

(23) 前部要素Xの音調型 (旧・外海町)

- A型: コ [ムギ] ガ (小麦が)、タ [キ] ギガ (薪が)、サ [カナ] ガ (魚が)、イ [ワシ] ガ (鯛が)、チ [マ] キガ (粽が)、[コーリ] ガ (氷が)、ト [カ] ゲガ (蜥蜴が)
- B型: スズリ [ガ] (硯が)、タカラ [ガ] (宝が)、ウサギ [ガ] (兎が)、ウズラ [ガ] (鶉が)、ヨモギ [ガ] (蓬が)、タワラ [ガ] (俵が)、ネズミ [ガ] (鼠が)

これらを前部要素Xとした複合名詞の音調型の例が、次の(24)と(25)に示されたものである。これらの例から、この旧・外海町方言では、複合語の前部要素Xが3モーラになっても式保存が成立しており、2つの型の中和は起こっていないことが分かる。(以下の(24)に挙げる複合名詞の後部要素Yの型を再度示すと、「箱」(ハ [コ] ガ)、「籠」(カ [ゴ] ガ)はA型、「団子」([ダン]ゴ [ガ])、「枕」([マク]ラ [ガ])はB型である。)

(24) 旧・外海町の複合名詞Zにおける式保存 (Xが3モーラの場合) (H氏の音調型)

	A型		B型
小麦箱	コ [ム] ギバコ コ [ムギ] バコガ	硯箱	[スズ] リバ [コ] [スズリ] バコ [ガ]
薪箱	タ [キ] ギバコ タ [キギ] バコガ	宝箱	[タカ] ラバ [コ] [タカ] ラバコ [ガ]
魚籠	サ [カナ] カゴ サ [カナ] カゴガ	兎籠	[ウサ] ギカ [ゴ] [ウサ] ギカゴ [ガ]
鯛団子	イ [ワシ] ダンゴ イ [ワシ] ダンゴガ	鶉団子	[ウズ] ラダン [ゴ] [ウズ] ラダンゴ [ガ]
粽団子	チ [マキ] ダンゴ チ [マキ] ダンゴガ	蓬団子	[ヨモギ] ダン [ゴ] [ヨモギ] ダンゴ [ガ]
氷枕	—未調査— [コーリ] マクラガ	俵枕	[タワ] ラマク [ラ] [タワ] ラマクラ [ガ]

同様に、3要素から成る複合名詞についても、式保存が成り立つ。一番先頭の要素が3モーラであっても、それがA型であれば複合名詞全体もA型になり、それがB型であれば複合名詞もB型になる。これは次の例から分かる。(ちなみに、この複合名詞の最後部要素「網」([ア]ミ [ガ])はB型である。)

**(25) 旧・外海町方言の複合名詞Zにおける式保存（Xが3モーラの場合）**

A型：イ [ワ] シトリアミ（鯛捕り網）、ト [カ] ゲトリアミ（蜥蜴捕り網）

B型：[ウサ] ギトリア [ミ（兎捕り網）、[ネズ] ミトリア [ミ（鼠捕り網）

このように、旧・外海町の体系においては、Xが3モーラ以上の複合名詞においても、2つの型の中和が生じず、式保存が成立していることが分かった。この点においても、旧・外海町のアクセントは、多くの長崎県の諸方言とは異なっている、と言えるだろう。

**4. まとめ**

以上、考察してきた結果をまとめると、旧・外海町のアクセントは次の3つの点において、他の長崎の二型アクセント体系とは異なった特徴を持つ。

**(26) 旧・外海町方言の二型アクセント体系の特徴（まとめ）**

- a. B型が、2つの高い音調の山を持つ「重起伏」の音調型を持っている。
- b. A型のピッチの下降位置が、文節の2モーラ目、と固定されておらず、文節全体の長さが4モーラ以上になると、3モーラ目以降にずれることがある。
- c. 複合名詞アクセントにおいて、前部要素が3モーラになっても、2つの型の中和が認められない。

旧・外海町のアクセントは、特にそのB型の音調型に重起伏音調が観察される、という点において、長崎県の方言の中でも異彩を放つ。またA型の下降位置が、文節内の2モーラ目、と指定されていないという点において、長崎・佐賀主流タイプの二型アクセント体系とは大きく異なっている。さらに、前部要素が3モーラの複合語においても式保存が見られ、2つの型の区別が保たれる（中和しない）。この点においても、周囲の二型体系とは一線を画す。

また、本稿の考察を通して分かってきたことは、この旧・外海町の体系において弁別的に機能している特徴は、文節の末尾に出現する高いピッチの山の有無である、という点である。すなわち、この旧・外海町の二型アクセント体系は、文節末のピッチが下がって終わるA型と、文節の最後の1モーラのピッチが上昇するB型との、2つの型が対立している体系である、と記述することができる。

さて、従来の先行研究は、九州西南部二型アクセント体系を論じる際に、それを「鹿児島タイプ」と「長崎タイプ」に大きく分けて、記述を行うことが多かった。たとえば木部（2012:80）は、その特徴の違いによって、九州二型アクセント体系全体を、次のように大別している。

**(27) 九州西南部二型アクセント体系の2つのタイプ（木部2012に基づく）**

鹿児島タイプ：アクセント単位の末尾のほうに、ピッチの下降や上昇が現れる。

長崎タイプ：アクセント単位の最初の部分に下降が出現する。

「鹿児島タイプ」に分類される方言の代表である鹿児島市方言は、アクセント単位（文節）の末尾から数えて最後の音節が下降する型（A型）と、末尾の音節が上昇する型（B型）の2つの型から成る。これに対して「長崎タイプ」の代表である長崎市方言は、アクセント単位（文節）の最初から数えて2つ目のモーラ直後にピッチが下がる型（A型）と、きわだったピッチの下降がなく、全体的に平坦な音調が持続する型（B型）から成る。

ところが本稿で記述・報告した旧・外海町の二型アクセント体系は、(27)に挙げられた2つのタイプの、どちらに属すとも断定できない。前述の通りこの方言は、（長崎県の一方言でありながらも）その弁別的特徴が、アクセント単位の最初の部分ではなく、末尾のほうに出現する。この点においてこの体系は、周辺に広く分布する長崎・佐賀主流タイプの二型アクセント体系とは、その性質が大きく異なっていると言えるだろう。そして、この点だけに着目すると、この体系は、むしろ「鹿児島タイプ」に性質が近いと言ってもよいだろう。

しかしながら、この方言のピッチ下降の位置は、（A型、B型とも）文節の後ろからではなく、その最初の部分から数えることによって算出される。この点では、この体系は、長崎タイプにその性質が似ている、とも言えるだろう。

長崎県に、このようなタイプの二型アクセント体系が存在することの発見は、今後の九州西南部二型アクセント体系の類型的考察においても、また、今後の通時的考察のためにも、意義あるものと言えるだろう。

#### 参考文献

- 木部暢子 (2012) 「西南部九州2型アクセントの特性の比較—助詞・助動詞のアクセントを中心として—」『音声研究』第16巻第1号：80-92.
- 坂口 至 (2001) 「長崎方言のアクセント」『音声研究』第5巻第3号：33-41.
- 平子達也・五十嵐陽介 (2016a) 「佐賀県中南部諸方言の二型アクセントについて」『実践国語学』第89号：(18)-(56).
- (2016b) 「熊本県玉名市方言のアクセントについての初期報告」『実践女子大学文学部 紀要』第58号：1-22.
- 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』東京：学会之指針社.
- 松浦年男 (2005) 「島原市方言における複合語音調の中和と外来語音調」『音韻研究』8号：49-57.
- (2008) 「長崎市方言における例外的複合語アクセントの生起条件」『音韻研究』11号：11-19.
- (2014) 『長崎方言からみた語音調の構造』東京：ひつじ書房.